

詩（新しき世界へ 1969年 11-12月号）

母性に捧ぐ

桜沢如一

すべての偉大なる人物は母から生れ
母の手にそだてられる！
ゲーテよりもゲーテの母！
野口英世よりも英世の母！
乃木希典よりも希典の母！
近江聖人よりも藤太郎の母！
孟子よりも孟母！
エヂソンの母！

すべての偉大なる人々より
かれらのかくれた母を私は尊敬する
すべて偉大なる人々の母は
その伝記はおろか、一日の生活のはしくれさへ
完全には知られていない！
すべて偉大なる人の母は全くかかっている
歴史も歴史家も、偉大なる人々については
ことこまやかにおしゃべりをするけれど
ああ、その母については何も知らぬ

偉大なる母は
偉大な人々を生み、かつ育て
着せ、かつ養い、教え、
しかもその苦勞と悲しみを何人にも語らない
ましてその子について誇るところはみじんもない
ただ涙をたたえて
ただ鼻をつまらせて
大きくなった我が子の
振舞を見つめているばかりだ
その振舞の偉大、勇敢、忍耐、
その壮烈なる自爆決死的精神を知らぬではないが

それよりも
寒い夜抱いてねたわが子
暑い日背にくくりつけて遠い道を歩いたわが子
いとけなき日の我が子
赤ン坊時代のわが子
始めて身に宿った日のわが子の思い出が
眼の底に焼きつけられているので
成人したわが子の勇敢無双な姿や
不抜の忍耐力を目のあたりに見ても夢を見る様で
ただ涙で眼がくもり、鼻がつまり
その涙の中には、幼い日のわが子の姿が
まぼろしに二重写しになって何も云へなくなるのだ
偉大なる人物は
より偉大なる母の傑作だ!
母は彫刻家だ
冷たい石の塊や、固い木にしがみつき、かじりつき
あけてもくれても
コツコツもくもくとして膨み、みがきあげ、
寝食を忘れ、我を忘れ
つかれ、やつれ、苦しみ
時としては、衣類や身の飾りを質札にかへ
冷い石ころや固い木ぎれに
自分の命を注ぎこみ
自分の血をかよわせ
遂にりっぱな作品に造り上げる
その出来ばえを、いかにほめちぎる人があっても
どうしてそんな言葉が耳に入ろう!
その作品に名誉の金牌がささげられても
どうしてそんなもので心がおどろう!
母の彫刻家の血と魂、生命は
もう冷い石ころ、木ぎれに移っている!
母はむくろだ
母はもう生ける屍だ
ただ、うっとり、自分の身と魂をこめた
作品をだまっとながめているばかりだ!
その沈黙は謙遜でもなければ

まして満足でもない！
それはどんな言葉でも表わせない
それは、いやそれこそ無我の心境である
無我の境、いや無それ自身
我もなく、彼もない無の世界
いや宇宙全体にひろがる心
精神、神！

「女は弱し、されど母は強し！」

母は神である！
母は偉大な人生を生み
母は偉大な人々を育て
母は文明を生み
母は健康をもたらし
母は人類の幸福を生む！

しかし母ならざる母
弱き母、健康ならざる母は
悪人を生み、罪をまきちらし
不幸と病弱をもって
人類と文明を暗くする！
母は人類のかくれたる指導者である
人類の真の指導者は母である！

指導者はすべて母の心をもて！
母は勇気と忍耐と
注意と、記憶と謙遜と
愛と犠牲の源泉である
母はまづ健康であらねばならず
母はまづ健康の原理を体得せねばならない
(昭和十六年十二月)

私はこんな心もちで、五、六年間毎土曜日、渋谷のガスビル会館講堂の「健全生活学校」「お母様の幸福学校」で高等栄養学を講義するために通っている。